妖怪ケンムン

カフェ・こんぶちにて

妖怪伝承といった民俗学的な話のみならず、ケンムン村の活動から見えてくる奄美のアイデンティティ（自然との共存）にまで話が及ぶ

ケンムンとは、奄美に伝わる妖怪で、私たちでいうところの河童のようだが、詳しく話を聞くと、様々な恰好をしたものがおり、妖怪という概念全体を表しているとも考えられる。足が長く、赤い目をし、全身は毛で覆われ、ガジュマルの樹上を好む。タコとシャコガイが嫌い。イタズラ好きで、実際にケンムンに会った、もしくはイタズラされたという古老は多い。今でこそケンムンの話は面白おかしく喋ることができるが、昔はそのようなものの目撃談はタブーとされていたようだ。（Taw）

ケンムンは、奄美大島をはじめとした周辺の地域で語られる妖怪である。主に人里と自然の交わる場所（海岸、山小屋、あぜ道など）に現れるとされ、人間にいたずらをしたり逆に仕事を手伝ったりもするという。ケンムンを見ることのできる人は「神高い（かむだかい）人」と呼ばれ、普通の人には感じられない不思議な感覚を持つとされた。そのため、ケンムンを見たことを他の人にしゃべるのはあまり好ましくないとされていたが、近年ではケンムンが妖怪としてキャラクター化してきた影響か雑誌等で目撃談を話す人が多い。フィールドワークの際に「ケンムンは人里と自然の調和の象徴」と話した人がいたが、目撃談を話す人に高齢者が多く若い人の話がほとんど無かったことから、調和の象徴としてのケンムンが現れづらい環境にあるのかも知れない。とはいえ、そのほかの幽霊や妖怪の目撃談は数多くあるので、神高い人が現れるには適した土地柄であるといえるかもしれない。（Na）

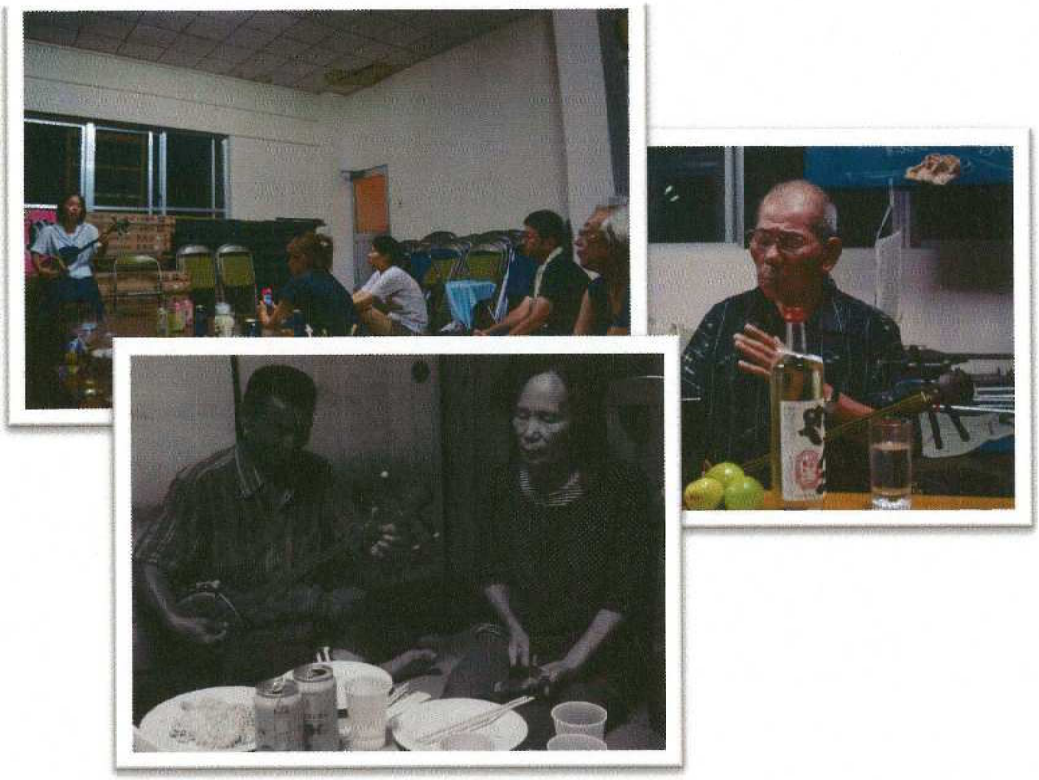
奄美の妖怪ケンムンの話を聞き、ここでも奄美の人たちの自然に対する畏敬の念が感じられた。ケンムンは、樹の精霊であるというところから、自然に対しての恐れや敬意の象徴として生まれたのではないかと思った。（Ne）

奄美滞在中に会えるのではないかと期待しましたが、会えませんでした(涙)いや、やっぱり怖いから会えなくてよかった！奄美にはたくさんの自然が残っているので、きっとどこかにケンムンもいるんじゃないかなと私は思っています。（Do）

島唄

清水の公民館にて

加計呂麻・諸鈍の民家にて



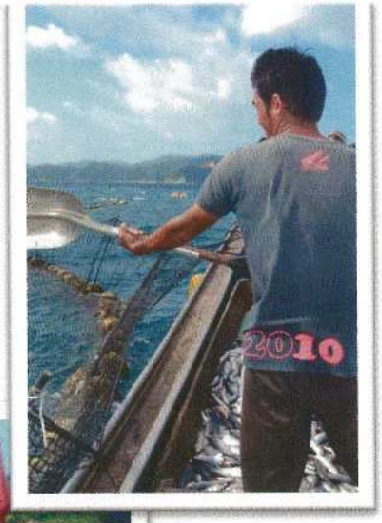
この合宿の期間中、何回も島唄を披露していただく機会がありました。奄美大島では現在においてもとても生活に密着したもので、外から来た人には聞いて欲しいと思える島の自慢のものなんだなと感じました。(Taj)

ゾワワワ！と鳥肌が立ったのを覚えています。あの神秘的な裏声は、どこか現実離れした世界へと私を連れて行ってくれました。そして、上手い！ではなく、芸術だなぁ、と私は感じ、どうしても島唄の素晴らしさを忘れたくなくて卒論の題材にしてしまいました。あぁ・・・奄美に行って島唄聞きたいよぅ！！！(Do)

初めて奄美の島唄を聴いたとき、私たちの分からない言葉で島の人同士がコミュニケーションを取っているようだと思いました。リズムも私が感じたことのない独特なもので、何を言っているのか全く分からなかったのです。奄美の人にとって、島唄は島の人のアイデンティティーを確かめるものなのだそうです。しかし島唄を聴かせてくれた高校生の女の子は、高校の授業に島唄を教わるような授業はなく、周りに島唄を習っている友達もいないと言っていました。昔の言葉が多くて意味が分からないため、先生に教わりながら覚えるそうです。これは意外に感じました。若い人も日頃から島唄を教わるような環境があればと思います。島唄は、演奏者たちのかけ合いが印象的で、それはそのときだけの即興的なものでもあるそうです。ジャズも、リードする人の演奏に、他の楽器の人が合わせるようにして成り立っていて、その日・その場所でのライブは一度きり、楽譜通りには演奏されないのです。島唄とジャズは似ているところがあるかもしれないと意外な発見もありました。(Mu)

近大マグロ養殖場

花天まで海上タクシーで向かい、マグロ養殖の現場を見学



今日注目の集まっているマグロ完全養殖の現場を見学した。私たちが見学した生簀は採卵用のマグロ生簀で、ちょうどマグロにエサをやるところであった。エサはサバなどの生魚であったが、普通、出荷用のマグロにはペレットを与えるようだ。通常のマグロは2～3年で出荷サイズに成長する。写真のマグロは5年ほどだという。近親交配を避けるために8年で変化をつける。マグロは大型の魚類だが、その卵は1ミリほどで、浮遊性を持っている。それを網で掬い採卵するという。飼育スタッフや研究者の方々には頭が下がるばかりだ。(Taw)

近大ファンにとってはたまらないスポットでした。こんな大阪から離れた海にも同士(マグロ)がいたのだなぁと思うと、近大の偉大さとマグロへの愛しさで胸がいっぱいになりました。ご飯いっぱい食べて元気に育って(美味しくなって)欲しいです。(Do)

ボブマリン奄美のマリン・レジャー体験

海釣り・シュノーケリング

奄美の魅力は、海遊び抜きには考えられないほど、充実した時間を過ごせます。シュノーケリング、バナナボート、釣りなど、海遊びも私が奈良県の出身だからということもあり、普段できない経験ばかりで、感動しました。間近で巨大なテーブルサンゴを見たり、綺麗な小さな魚に餌をあげたり、奄美地方でしか釣れない魚を釣ったり。奄美の自然の特徴でもある、突然のスコールを体験しておくのもいいかもしれません。スコールになると一気に気温が下がり、凍えるほど寒いです。もちろん海は透き通るほど綺麗です。釣った魚は本当に美味しいです。(Mu)

綺麗な海を全力で満喫することが出来ました。魚釣りにバナナボート、シュノーケリング。海の中でリアルニモちゃんを見れたときの感動と、変な魚を釣った快感は今も忘れられません(笑)変な魚めっちゃ美味しかったです！また、海

遊びのガイドのお兄さんがかなりイケメンなので是非！是非！女の子は期待して行って欲しいです！！！あと、泳げない私でもすごく楽しむことができました。(Do)

私が奄美大島に行く前から一番楽しみにしていたイベントで、自分の思うように潜って魚に触れることができるということや、綺麗な海の中を泳ぐことができるというだけでとても充実した時間でした。(Taj)

奄美の海の美しさを実感できたのが海遊びの時間であった。まず、シュノーケリングでは様々な種類の魚たちやサンゴたちと出会えることができた。水族館以外でクマノミを見たことがなかったので、クマノミを間近で見ることができたことがシュノーケリングでの一番の思い出である。私自身ダイビングをしているのであるが、奄美の海は格別であり、澄んでいて綺麗で生き物も豊富であるように思われる。次に、釣りでは、たくさんの色鮮やかな魚が釣れたことに驚いた。どの魚も色鮮やかで南国らしい魚が多く生息しているのだと感じた。多くの生き物が奄美の海で生きているのだということを知るとともに、海の豊かさをシュノーケリングや釣りを通して感じ取れた。(Ne)

青い海の中で、美しい熱帯魚やサンゴを間近に見ることができました。まるで夢を見るようで感動しました。(Ka)

加計呂麻の暮らしと文化

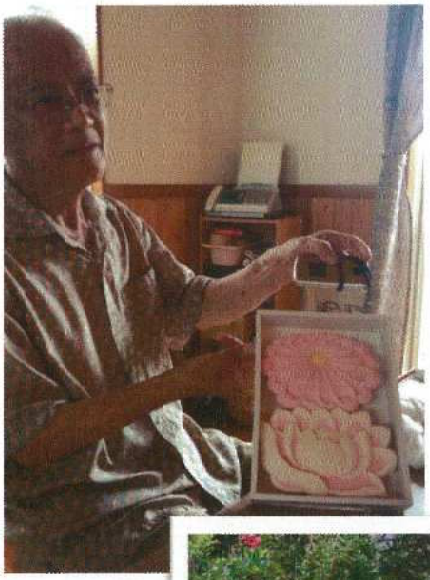
諸鈍・徳浜にて

加計呂麻島を訪れる前は、名前は聞いたことはあるが、どのような場所であるか全く想像できない場所であった。しかし、実際に訪れてみて、感じたことがある。この島は時間を忘れさせてくれる時間であった。コンビニもなければ、携帯の電波も届かない場所であったため、不便さを最初は感じてしまった。しかし徐々に、この場所は都会の日常を忘れさせてくれるばかりか時間までも忘れさせてくれる場所であるのではないかと思い始めた。ゆっくりとした時間の流れを感じることのできる場所であるように思った。(Ne)

防波堤で釣りをしたのだが、すこし水面を覗いただけで、まるでアクアリウムのようであった。奄美の魚影に感動しつつ、ほかの参加者たちと楽しく釣りをしていた。皆、順調に魚が釣れ、さて帰ろうかと思ったときに強烈なアタリが。奮闘の末釣り上げた魚はなんとサメだった。よもやサメを釣るとは思ってもみなかった。すっかり奄美の自然の虜になってしまった。(Taw)

根瀬部の暮らしと文化

恵原義之氏に根瀬部集落を案内いただき、八月踊りの練習にも参加させていただく



根瀬部では、恵原先生に地区を案内していただいた。地元の方が「力水」としても用いる水の湧く泉には、ショウジンバラと呼ばれる両生類が生息していた。昔から、ショウジンバラのいる水はきれいな水だということで飲料水にしていたという。おそらく、湧水が有毒か否かの判断材料として見てきたのだろう。

道を歩いていると、ブロック塀に棒が立てかけてあった。地元ではそれを「用心棒」と呼ぶらしい。歩きながらその棒で地面を叩き、音でハブを逃がす、もしくはハブを叩いて撃退するためのものであるという。先人の知恵が根瀬部には今も息づいていた。(Taw)

合宿最後の二日間で訪れた根瀬部では、集落内を見て回っている際に面白いものをいくつか見ることができた。散策の途中に訪れた根瀬部弁才天神社は、祭神である弁財天と厳島神社の関係から、奄美に流れ着いたとされる平家の落人伝説とのかかわりを持つ。また神社の建っている場所は、かつて奄美の霊能者であるノロと呼ばれる人々の聖地であったそうである。他にも集落内の中心部では石敢當を見つけた。石敢當は沖縄でも見ることができる魔よけの一種で、T字路や三叉路の突き当たりに置くことで魔物（まっすぐにしか進むことができない）を打ち砕く効果を持つとされる。興味深いのは石敢當の後ろにある家の塀が一部四角く切り取られていることだった。これは、石敢當によって魔物を家に入ってこれないようにし、代わりに神様を迎え入れる入り口なのだという。またこの家は集落で一番古くにできた家系の家で、この家から集落が広がっていったのだという。（Na）

根瀬部に移り、八月踊りを体験させてもらった。なかなかリズムを掴むのに時間がかかった。少し踊れるようになり、周りを見ることができるようになると、おどっている女性も男性も終始笑顔であることに気付いた。このおどりは、男性と女性との掛け合いによって進められていくものであると知って、笑顔で踊っていることが理解できた。その様子を見て、私まで楽しい気持ちになり、笑顔になっていた。（Ne）

奄美の島唄は感情にそのまま訴えかけてくる、といえばいいのだろうか。曲も節も知らないはずであるのに、身体が動くというのは面白い感覚であった。島唄に合わせて八月踊りをした際、私の所作を見て女性たちが大笑いしていた。もちろん、私の踊りが不恰好だったからであるが…。だが同時に、一つ所に集まり、みんなで歌い踊ることで一種のトランス状態に入っているから、とも恵原先生に伺った。（Taw）

奄美大島の集落では、旧暦8月に祈り祭りが行われます。この時に踊るのが八月踊りです。今回の合宿では、島の人といっしょに八月踊りの練習に参加することができました。島の人のやさしさがうれしかったです。（Ka）

Q 奄美の魅力は？ ～奄美でもっとも印象的だったポイント～

A 奄美の魅力は、やはりその自然環境だと思う。トビハゼ、キノボリトカゲ、ルリカケス(残念ながら死んでいたが…)など、図鑑の中でしか見たことのない動物たちに、日常の中で出会えてしまう素晴らしさは筆舌につくしがたく、私にとっては、一歩歩くごとに宝石が落ちていることと等しかった。と同時に、自分たちが生態系の中に組み込まれているということを再認識させる奄美の自然はぜひ肌で感じてほしい。(俵)

A 奄美で最も印象的であったところは、自然の豊かさであるように思う。特に、私自身は海の美しさに魅力を感じた。図鑑でしか見たことないような魚や、水族館でしか見ることのできない魚を間近で見ることができ、非常に心を打たれた。子どものころ、魚の図鑑を見ることが大好きだった私が密かに抱いていた、この図鑑の中の魚たちを実際に見たい！という夢が叶った場所が奄美の海である。まだ見たことのない魚や生き物がたくさん棲む奄美の海は、奄美の魅力であるように思う。(禰宜田)

A あやまる岬の周辺の岩場から海を見たとき、なぜか私は「この世の果てに来てしまった」という感想を抱いた。最初は、透き通った遠浅の海にところどころ岩が転がり、その向こうに黒々とした外海が広がっているその光景が、雪国の山村で育った自分にはなじみの薄いものだったからなのかもしれないと思っていた。しかし、合宿中に様々なものを見聞きするうちに自分の中で別の考えが浮かんできた。

奄美大島において「ムラ」とは集落としての意味だけでなく、「領域」としての意味も持つ。かつて島のそれぞれのムラは深山々によって隔絶されており、現在以上に交流が少なく独自の方言、文化を持っていた。そうしたムラどうしが交流する際に使ったのが舟であり、人々は海を通じてつながっていたのだという。他にも、琉球や薩摩といった周辺の地域との交流も無論海を通じて行われていた。つまり海は生活の場であり異なる世界との境界線であったといえる。

また、奄美に仏教が伝来する以前、人々は死者を鳥に食わせる鳥葬を行っていたが、その場所は私が最初に訪れたような浅瀬であったという。つまり海には生者の世界と死者の世界の境界線という性格もあったことになる。

こうしたことを考えてみると、私の抱いた「この世の果て」という感想は幾分的を射ているように思われる。島の人々にとって海は、物理的にも精神的にも異なる世界への境界線であり、自分の世界の文字通り「果て」であったのだ。

しかし、なぜ私はそのような感想を奄美に降り立った最初の場所で感じたのだろうか。普段の生活ではなかなか感じることのできない境界線を目の当たりにしたからか、あるいは奄美全体に渦巻く神高い人にしか感じられない「何か」が私に影響を及ぼしたのかもしれない。(中井)

A　一般の民家が印象的でした。どこの集落も現代的な家屋はほとんどなく、内地とは全く違う家屋や、住宅街の様子は一昔前を思わせる雰囲気でした。歴史民俗資料館で内地は進みすぎている、というお話を思い出して、ここの人たちはこの雰囲気と便利すぎない環境に自分たちの力で生きているという誇りを感じているのかなと思いました。（多鹿）

A　表向きではもちろん海です。透き通ったエメラルドグリーンの海と照りつける太陽、そして優しく吹く風。これらは私をゆっくりと流れる奄美の時間に引き込み、私を拘束し続けるスマホや悩みから解放してくれました。砂浜に座って海を眺めるだけで、本当に幸せになれるので、私にとって奄美の海は最も印象的だったポイントです。

　そして表には出せない最も印象的だったポイントは、もちろん清水の集会場です。厳密に言うなら集会場のボットン便所です。ここだけは私を奄美から現実へ引きづり出しました(笑)しかし、今になって思えばそれすらもいい思い出だし、トイレであれだけワーキャー騒げるのも今後無いだろうと思います。ひと夏の思い出にボットン便所、オススメです。（土井）

A　2度奄美に行きましたが、1度目は台風による被害を目の当たりにし、島の人の暮らしの大変さを体感しました。2度目は台風の影響をほとんど受けずに、奄美を満喫しました。対照的な合宿を経験し、奄美の自然にもっと注意を払わなければと思いました。常に危険と隣り合わせの暮らしですが、島の人は、自然の様子を観察し、変化に合わせて落ち着いた行動をとっておられました。私は、大きな台風が来たときにはどうしていいか分からず、来なければ自然の驚異など忘れてしまっていましたが、奄美の人には、常に緊張感があると感じました。そしてその緊張感を楽しんでいるとも感じました。奄美の自然を敬い、同時に恐怖している島の人の暮らし方を学べたことが良い経験になりました。2度の合宿を経て分かったことです。（村井）

Q 奄美の観光についてのアイデアは？ ～奄美観光のこれから～

A 奄美の人々は、私たちの感動、たとえば動物との出会いや海遊びには親近感がないようであった。これは決して奄美の人々が地域に無関心であるということではなく、きっと外部から訪れた私たちにしか見えない視点があったのだと思う。私自身、自分の地元を知っているようでいて、知らなかった、と気づかされる経験は多々ある。地元にとっては日常の風景、いつもの生活が、大阪から尋ねた私たちにとってはキラキラ輝くものに見えるのである。そういった輝きを地域の方と共有していくことが近道ではないだろうか。また、観光する私たちも、パンフレット・ガイドブック一辺倒にならず、自分の足で歩くという意識も必要だろう。もちろん、インフラの整備も必要かもしれないが、それは地域の方々の必要性を超えるものであってはならないと私は考える。（俵）

A 奄美の自然はすばらしいということを奄美の人たち全員が気づくことが観光のためにできる第一歩であるのではないかと思う。私たちは、都会に出向くことが多くなったりして、自然から遠ざかった生活を送っている人たちが多いように思う。買い物に行くときは都会へ出たり、遊びに行くにも繁華街へ出たりなど、自然と触れる機会が少なくなってしまう。だからこそ、奄美の自然に触れることで時間を忘れることができたり、ゆったりとした時間を過ごすことができたりするのである。そのような魅力を奄美の自然は持っていると思うので、奄美の人たち全員がその自然の魅力に気づくことが重要であるように思う。（禰宜田）

A 奄美大島は近隣の沖縄と比べて飛行機の便数も少なく、そのため観光に来るには少々不便であり、また開発も進んでいない。だが奄美は沖縄のようなリゾート化を目指すのは適していないように思う。奄美の持つのどかな自然・空気を生かし「なにもないを楽しむ場」とするのはどうだろうか。引率された奄美出身の教授は「ここでは時間がほどけてしまう」とおっしゃっていた。短期間の休みではなく長期間滞在し、喧騒から離れて徹底的に骨休めをする。何も考えずにぼんやりできる場所として奄美は最適であると思う。問題点としては、そうした休暇をとることのできる人が日本にどれほどいるのかということであるが。

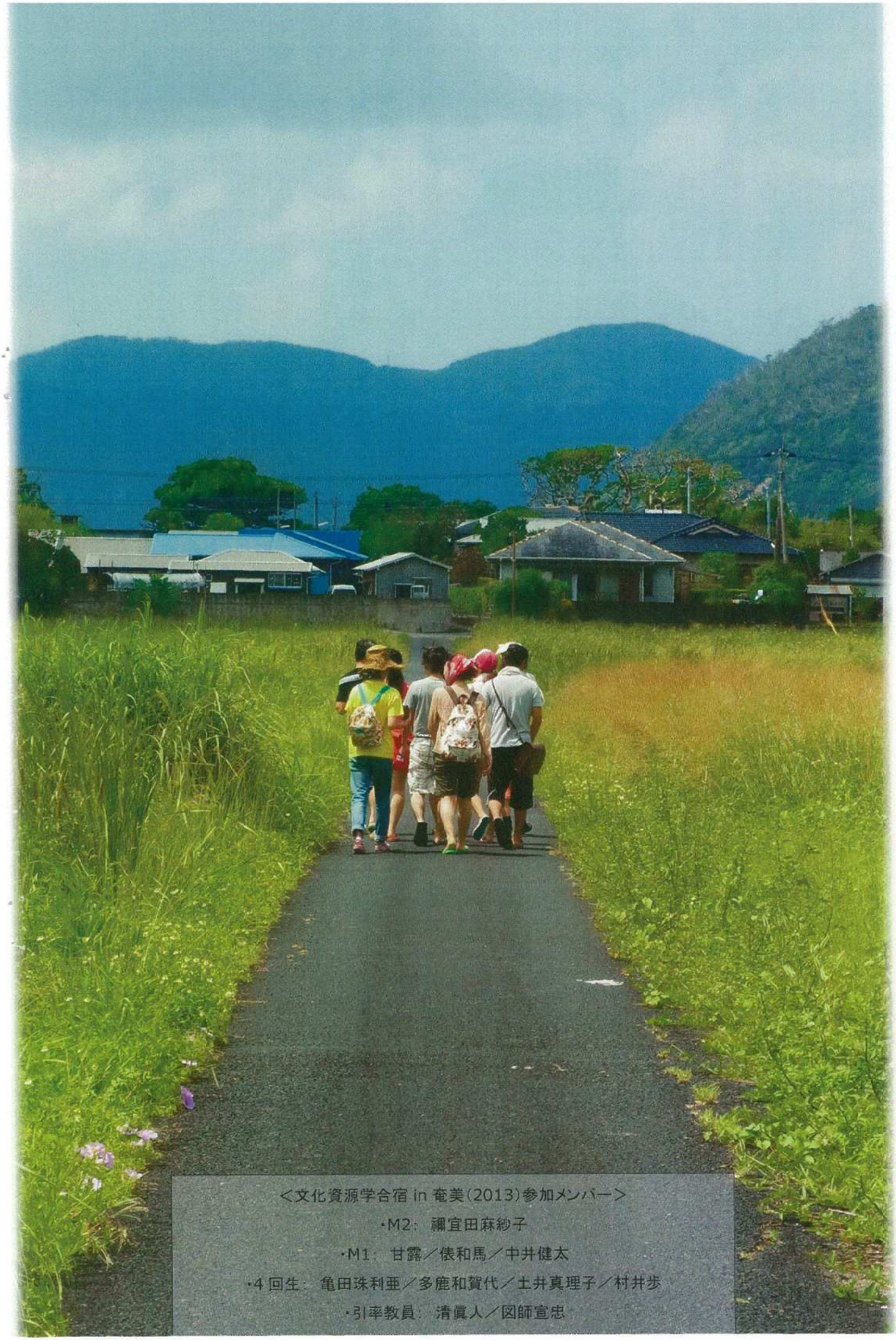
またうつ病をはじめとした心の病を抱えた人の治療法として、極地療法というものがあるが、そうした人々の治療の場としても考えてみるのもよいのではないかと思う。（中井）

A 奄美大島は何もないところが魅力だと思います。というのは他の観光地のように観光客を食いつかせるようなところがないという意味で、逆にそれがないことが癒しになると思います。また、人々の暮らしぶりや、文化の違いを感じ、自分を見つめなおす旅としてアピールすればいいと思います。（多鹿）

A 観光客をたくさん呼びたいのであれば、やはり交通の便をよくするのが第一だと思います。また、全室オーシャンビューの綺麗なホテルを建てるなどすればそれなりに、人は来るだろうなぁと思います。だけど、私はそれをして欲しくないと感じています。なぜなら、人がたくさん訪れると自然は少なからず減ってしまうだろうし、人工的な美しさは自然の美しさには勝てないと私は思うからです。

現地の人は奄美の素晴らしさが当たり前になってしまいがちだと思いますが、そこを当たり前と思わずに、素晴らしいものだと再認識することで、内側からの奄美の魅力というものが見つけられると思います。そうすることで、奄美のこれからが見えてくるのではないでしょうか。また、変わらないことも、素晴らしいと私は思うので、いつまでも変わらない美しい奄美で、訪れた人々を癒せる場所であって欲しいです。（土井）

A　奄美大島は沖縄のように、観光地化されたところではありません。魅力はたくさんあるのに、知らない人が多いことは残念です。きっと一度行くと誰もがまた訪れたくなる場所です。しかし私は奄美が沖縄のようにはなってほしくないのです。完全な観光地になると、離れてしまうファンもいると思うのです。観光客が増えればそれだけ島も潤うのだと思いますが、「知る人ぞ知る」場所であってほしいのです。私の個人的な勝手な意見ですが、観光地化しきっていないところが魅力だと思います。奄美大島へ行くと心が解放されます。これからも私は、元気を充電する場所として奄美を訪れたいと考えています。そのためにも、自分で見つけて体感する場所であってほしいのです。（村井）



<文化資源学合宿 in 奄美(2013)参加メンバー>

・M2：禰宜田麻紗子

・M1：甘露／俵和馬／中井健太

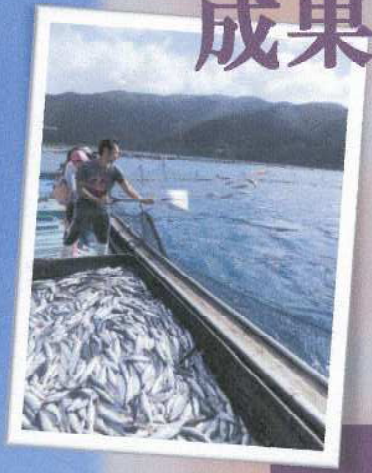
・4 回生：亀田珠利亜／多鹿和賀代／土井真理子／村井歩

・引率教員：清眞人／図師宣忠

文化資源学合宿 in 奄美

成果報告会（自校学習イベント）

奄美の魅力
伝えます



2013年12月20日（金）

16:30-18:00

A館306教室

近畿大学文芸学部
文化・歴史学科
担当：清眞人、図師宣忠

奄美の自然・文化・歴史を満喫する文化資源学の実践的アプローチ

あやまる岬／マングローブ
近大マグロ養殖場
シュノーケリング／海釣り
島唄／八月踊り／妖怪ケンムン

奄美ゼミの魅力

奄美の島々では、近年、研究者や大学のゼミ合宿が盛んだ。固有の動植物が生息する自然や美しい景観、また奄美の特異な歴史や伝統文化、祈りとともにある人々の生活などなど、その研究テーマは幅広い。また、奄美を訪れる理由のひとつに、そのホスピタリティーをあげる大学担当者もおり、今回の特集では、奄美の島々に長年来島する大学に取材し、奄美ゼミの魅力を語ってもらった。

University 同志社女子大学（京都府田辺市）

現代社会学部・社会システム学科 グローカリズム研究会 担当教員／大西 秀之

●きっかけは？

担当教員である私（大西）が、以前から徳之島や奄美大島で調査していたことがきっかけだが、連良く奄美で研究活動をしている方々と出会い、協力をもらえたことが大きな理由。2008年より毎年、学生約20名（引率教員2～3名）とともに、来島している。

●テーマは？

奄美の住民が、自らの環境・文化をどのように認識しているか、またその多様な認識や意見を調査把握するため。

●ゼミの成果

加計呂麻島の実久地区の8集落のカミ山・カミ道などとの文化的景観に関する地域住民の多様な知識を明らかにすることができたほか、奄美の環境保護に対する多様な意見を知ることができた。本年は、加計呂麻島の瀬相周辺の5集落でターン者の方々の自宅に、学生20名が「民泊」することができ、現在、報告書を作成中だ。

次年度以降は、赤木名地区の文化的景観に関する知識・認識の聞き取り調査を実施し、将来的には過去の加計呂麻の調査結果と比較したいと考えている。

●今後の展望

「奄美遺産」に代表されるように、地域自らが環境・文化・歴史などの価値を見い出し、それに基づいて地域の将来を選択することを期待している。また、過去の調査目的である「奄美の文化的景観」をテーマにできれば、環境から文化まで幅広く取り扱う内容になるかと思っている。

油井豊年祭調査（瀬戸内町）

エコツーリズム勉強会

カミ道・カミ山の調査（加計呂麻島）

加計呂麻島での民泊

奄美市町村教育委員会ほか（H24.3～）

島名	団体名	来島（視察）目的	時期	人数
奄美大島本島	筑波大学 環境・資源研究合同チーム	奄美の居住環境の総合調査	H24/3/26～3/30	11名
	研究者	奄美市内遺跡調査	H24/4月上旬	1名
	青山学院大学	奄美中世遺跡、赤木名城調査	H24/4/14～4/17	2名
	北海道大学	赤木名地区文化的景観調査	H24/4/25～4/29	1名
	研究者	歴史民俗資料館石器類調査	H24/4/29～4/30	1名
	駒澤大学 地理学科	地域文化、けんむん調査	H24/6/24～6/29	20名
	東京大学大学院 人文社会系研究科	遺跡や古文書等史料の調査研究	H24/6/24.26	約20名
	研究者	島唄調査	H24/6/28	7名
	大手前大学	マツノト遺跡、フワガネク遺跡出土品調査	H24/7/1～7/3	3名
	筑波大学	笠利町字佐仁集落古民家、高倉調査等	H24/7/4～7/9	5名
	鹿児島大学 教育学部	離島の教育現場を体験する［学校環境調査実習］	H24/9/5～9/8	40名
	同志社女子大学	地域の伝統文化や環境意識等についての調査	H24/9/19～9/22	22名
	大阪市立大学大学院	奄美大島地産地消研究調査	不明	不明
	武蔵大学	不明	不明	2名
徳之島	立命館大学 産業社会学部	不明	H24/9月10日間	1名
	立命館大学 産業社会学部	不明	H25/9月10日間	1名
	早稲田大学	チリ地震による奄美の被害について［津波被害の聞き取り］	H25/9月中	3名
	鹿児島大学 総合島嶼環境学研究会	地域の環境文化に依拠した世界自然遺産のあり方に関する調査	H25/6.7月～H26/3月末まで予定	20名余り
大和村	東京農工大学 農学部	奇美大島のカエルの食性調査等	H24/9	1名
	東京農工大学 農学部	奇美大島のカエルの食性調査等	H25/2.5.6.7.10.11月	1名
	東京大学 農学部	奇美在来のニホンミツバチの生態（花粉調査など）調査	H25～H25/5.6.11.2～4月頃	2名
宇検村	徳島大学 ツシマ・ケラマ列イエンバ調査	奇美の方言調査	H24/3	2名

島名	団体名	来島（視察）目的	時期	人数
喜界島	聖山学院大学	倉木崎海岸遺跡調査	H24/4/14～4/17	2名
	筑波大学 芸術系	奄美の屋敷の構造ひきもん造りを調査	H24/12	3名
	駒澤大学 文学部	ウンムン岳遺跡とシマの空間構造	H25/8/23～6/26	5名
	琉球大学 人間科学科	民俗文化に関する聞き取り調査	H25/8/10～8/17	11名
	徳島大学 ツシマ・ケラマ列イエンバ調査	奄美の方言調査	H25/9	5名
奄美大島本島	駒澤大学	地域文化、けんむん調査	H24/6/24～6/29	20名
	東京大学大学院 人文社会系研究科	遺跡や古文書等史料の調査研究	H24/6/26～6/27	約20名
	東海大学	文化人類学の調査や島を体験	H24/7	約20名
	近畿大学	島を体験・体感する	H24/8	約20名
	鹿児島大学 教育学部	離島の教育現場を体験する［学校環境調査実習］	H24/8/5～9/6	40名
	岡山理科大学	エコツーリズムのための野外スポーツの体験	H24/8/9～9/12	25名
	東京経済大学	馬牧会の有効利用を探る	H24/8/10～9/11	14名
	同志社女子大学	地域の伝統文化や環境意識等についての調査	H24/8/18～8/19	22名
	駒澤大学	Iターン調査、けんむん調査	H25/6	約7名
	近畿大学	島を体験する	H25/8/10～8/17	約20名
	岡山理科大学	エコツーリズムのための野外スポーツの体験	H25/9	約25名
	同志社女子大学	地域の伝統文化や環境意識等についての調査	H25/9	約22名

University 近畿大学（大阪府東大阪市）

①文芸学部文化・歴史学科／文化資源学専攻／考古学
②文芸学部芸術学科／造形芸術専攻／陶芸ゼミ
担当教員／清 直人、上田 貴子、図師 宣忠ほか

奄美市根瀬部にて、八月踊りを体験。

奄美市歴史民俗資料館にて、

古老からの聞き取り風景

瀬戸内町にある近畿大学クロマグロ養殖場にて、給餌を見学。

●きっかけは？

2009年、清眞人教授が瀬戸内町漆水集落を中心とした奄美の文化研究のためゼミ生と同町を訪れたことがきっかけ。2012年からは、文化・歴史学科全体で「文化資源学」をテーマとした「奄美合宿」を行なっている（他学科・他学部からの参加もあり）。また、芸術学科の陶芸ゼミも2010年から奄美合宿を行なっていて、主に夏期にそれぞれ約10名前後が来島している。

●テーマは？

文芸学部文化・歴史学科では、「文化資源学」を教育のひとつの軸としている。これは、環境学、民俗学、社会学をはじめさまざまな分野が融合するかたちで、地域資源を多角的に掘り起こし、その保全と利用のバランスを考えながら活用の方策を探ることを目指すものである。

その観点から、今年度は、学生自身が自然環境、歴史文化を「再」発見し、持続可能な形で観光に活かすために、マップや冊子の作成を通じて奄美の文化資源を発信し利活用するという取り組みを進めている。

具体的には、Uターンやターンで離島暮らしを始める人たちの生活スタイルに注目して、都市部と離島をつなげるエコツアーを企画・立案するための合宿を実施し、都市部の学生の目線で離島振興の手立てを考えているところである。（2013年度の鹿児島県離島振興事業「アイランドキャンパス」に採択）

また、陶芸ゼミでは、奄美の小妖怪ケンムンをテーマにした陶芸作品や、ケンムンTシャツを制作して、島のイベントに参加するなどの活動をしている。

学校法人 加計学園 岡山理科大学（岡山県岡山市）

全学部全学科の学生対象
担当教員／西村次郎、森博史、松尾美香

AMAMI SEMINAR

カヤックの講習

清水と景観間をシーカヤックで往復

油井集落での納涼祭に参加

阿鉄集落の皆さんとの交流会

●きっかけは？

元岡山理科大学准教授で、瀬戸内町阿鉄在住のヨットマン宮野祥志氏（NPOセイラビリティ奄美代表）との「海を愛する人々の絆」がきっかけ。2009年から、教養教育科目「生涯スポーツⅢ・エコツーリズムのための野外スポーツ」集中講義（4泊5日）で、毎年学生約15名（引率教員3名）が来島している。

●テーマは？

総合的な「人間力」を身につけることを目的として、①大島海峡の美しい海をフィールドに、エコツーリズムの基本的な技法であるシーカヤックとスノーケリングを習得する②ホームステイ等を通して、地元の人達と交流を深めながら、伝統文化に触れ、コミュニケーション能力を高める③個々のテーマを設定して、問題発見解決型授業で、主体的に学び、考え、行動する人材育成する、内容となっている。

●ゼミの成果

「教室だけが学びの場ではない」の言葉通り、学生たちが日常の生活から離れた環境を体験することで、学生たちの心に新たな「気づき」が生まれている。奄美の山、島、海、風、人のすべてが学生の内面的世界を激しく揺さぶるからだと考える。教育とは「人間の魂を揺さぶる」ことだと思う。

●今後の展望

2011年に瀬戸内町と本学を運営する加計学園とが、教育資源をはじめ、様々な分野で連携し発展していくことを目的に、包括連携協定を結びました。今後も、周「心の交流」を深め双方の発展に努めたい。

オーシャンビューレストラン「forest」
ランチ 11:30～16:00
ディナー 18:30～22:00 年中無休

奄美で イチバン
海を満喫できる場所

倉崎ビーチの真上
270°海に囲まれた宿泊施設

奄美最大のダイビングショップ
体験ダイビング・ボートシュノーケル
サンセットクルージング キャンペーン実施中!!

プチリゾート＆ダイビング
ネイティブシー奄美

ホテル・レストラン TEL0997-62-2385 〒894-0412龍郷町芦徳835
ダイビングショップ TEL0997-56-4600 〒894-0412龍郷町芦徳423

ネイティブシー奄美

信号　郵便局（簡易含む）　薬局・薬店
押しボタン式信号　現金自動支払機　おみやげ店
ガソリンスタンド　有料駐車場　FON設置店（P24参照）
トイレ　風呂・サウナ　FREESPOT設置店（P24参照）
バリアフリー対応トイレ　AED設置場所（P04参照）

奄美市名瀬の市街地は一方通行が多いので、車を乗り入れる場合は十分注意して下さい。一方通行は ← で表記しています。
アーケードは昼間、車両通行禁止です。時間帯に注意して下さい。
本道なども悪路であったり不通となっている場合もあります。通行はなるべく避けましょう。

バス路線・乗り場のご案内

空港連絡バスの時刻表は道の島交通および各ホテルにご配布しています。

瀬戸内町を除く奄美大島の路線バスと空港連絡バスを運行している道の島交通のバス時刻表は携帯電話からアクセスできます。下記QRコードをご利用下さい。

「島バスモバイル」
http://shimabus.nansei-frontier.com/
PCからも利用できます。

竜美大島の路線バスはほとんどが名瀬発着です。下記の乗り場をご利用下さい。

「路線バス」乗り放題券がお得です！
詳しくはホームページでどうぞ。
http://shimabus.jp/

瀬戸内町の本島側は瀬戸内タクシーが、加計呂麻島は加計呂麻バスが運行しています。
加計呂麻バスはフェリー「かけろま」（P28の時刻表参照）に連絡しています。

瀬戸内海浜バス　0997-72-1904
加計呂麻バス　0997-75-0447

道の島交通(株)　TEL 0997-52-0509
奄美大島の路線バス・貸切バス(送迎・観光)
http://shimabus.jp

シマッチュのシマッチュによるシマッチュのための
あまみエフエム ディ！ウェイヴ
インターネットでもあまみエフエムが聴けます！
詳しくは http://www.npo-d.org/simul
専用アプリをダウンロードするとスマートフォンでもラジオを聞くことができます！
あまみエフエム放送動機旨に賛同いただいたサポーター会員による会費および広告料の収入とCMスポンサーによる広告収入によって、運営を支えられています。応援よろしくお願いします！
あまみエフエムサポーター募集中！
法人会員　入会金：5,000円　年会費：5,000円
一般会員　入会金：1,000円　年会費：3,000円
やんぱディ・スタジオ　TEL 0997-57-8366　FAX 0997-57-8367　http://www.npo-d.org/　d_wave777　777@npo-d.org
ラジオ・パソコン・スマホでお楽しみいただけます！

印刷
シマンチュに支えられ創業60年 鮮明堂 TEL:0997-52-5757
あらゆる印刷物全般おまかせ下さい。シール・印鑑・座判も

奄美大島

Celebrating 60th Anniversary 奄美群島日本復帰60周年 奄美市 April 28th 1953

（加計呂麻島・請島・与路島含む）

総面積 712km²（本島），77km²（加計呂麻島）
周囲　460km（本島），147km（加計呂麻島）
人口　65,770
（人口は平成22年10月1日現在、国勢調査より）

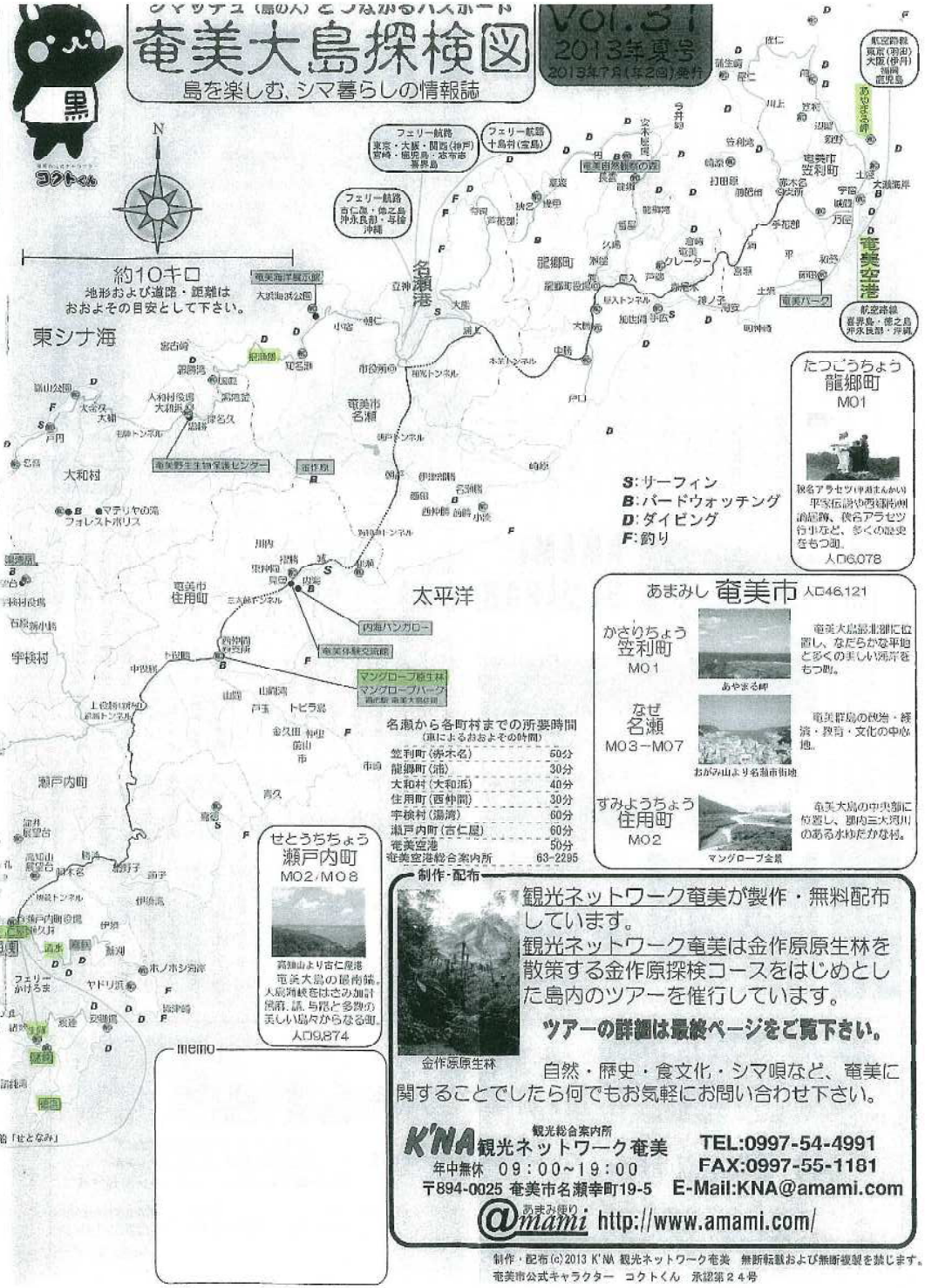
シマッチュ（島の人）とつながるパスポート

奄美大島探検図

島を楽しむ、シマ暮らしの情報誌

Vol.31
2013年夏号
2013年7月（年2回）発行

コクトくん



うけんそん 宇検村 MO2

黒潮岳鏡のオオタニワタリ
奄美群島の最高峰、また島建広域の霊峰ともいわれる奥地区をいただく自然が息づく村。
人口1,932

やまとそん 大和村 MO2

地涙の断崖よりタロ
山々におおわれた北は深々たる東シナ海に面しダイナミックな自然の景観が楽しめる村。
人口1,765

たつごうちょう 龍郷町 MO1

秘名アラセツ（中瀬まんかい）
平家伝説や西郷隆盛潜居跡、秋名アラセツ行事など、多くの歴史をもつ町。
人口6,078

あまみし 奄美市 人口46,121

かさりちょう 笠利町 MO1

あやまる岬

竜美大島最北部に位置し、なだらかな平地と多くの美しい海岸をもつ町。

なぜ 名瀬 MO3－MO7

おがみ山より名瀬市街地

竜美群島の政治・経済・教育・文化の中心地。

すみようちょう 住用町 MO2

マングローブ全景

竜美大島の中央部に位置し、国内三大河川のある水ゆたかな村。

せとうちちょう 瀬戸内町 MO2/MO8

嘉鉄山より古仁屋港
竜美大島の最南端。人扇海峡をはさみ加計呂麻、請、与路と多数の美しい島々からなる町。
人口9,874

名瀬から各町村までの所要時間
（車によるおおよその時間）

笠利町（赤木名）	60分
龍郷町（浦）	30分
大和村（大和浜）	40分
住用町（西仲間）	30分
宇検村（湯湾）	60分
瀬戸内町（古仁屋）	60分
竜美空港	50分
竜美空港総合案内所	63-2295

memo

制作・配布

金作原原生林

観光ネットワーク竜美が製作・無料配布しています。
観光ネットワーク竜美は金作原原生林を散策する金作原探検コースをはじめとした島内のツアーを催行しています。

ツアーの詳細は最終ページをご覧下さい。

自然・歴史・食文化・シマ唄など、竜美に関することでしたら何でもお気軽にお問い合わせ下さい。

観光総合案内所
K'NA 観光ネットワーク竜美
年中無休　09：00～19：00
〒894-0025 竜美市名瀬幸町19-5
TEL:0997-54-4991
FAX:0997-55-1181
E-Mail:KNA@amami.com
あまみ便り @mami http://www.amami.com/

制作・配布(c)2013 K'NA 観光ネットワーク竜美　無断転載および無断複製を禁じます。
竜美市公式キャラクター　コクトくん　承認第24号